

東京下町大空襲から75年目

(2020年3月10日記)

国際印刷大学校長 木下堯博

75年前の1945年3月10日東京の下町は米国などの連合軍によるB29約300機が東京下町を目標にして焼夷弾約1665トンを投下し、死者10万人、約40平方KMが消失した。当時、東京の向島吾妻町に両親と長女の妹(当時3歳)の3人が暮らしていたが、当日の大空襲で家屋が焼失し、吾妻橋、浅草、上野を経て、親戚の大森まで逃げ延びていった。家財や重要な預金通帳などすべて焼失、裸同然となった。

木下堯博は長男・当時11歳、向島吾妻町の吾妻第一小学校の5年生で、学童集団疎開で茨城県結城町に疎開をしていた。当日早朝、東京方面は大空襲のため火災で真赤な空で染めていた。

1945年8月15日の終戦を迎え、集団疎開をしていた学童全員、帰京したが、小学校は消失していたので、上野公園の山の上で解散式となったが、迎えに来た両親が少なく、この大空襲で大半の両親が死亡していた。幸い、私の両親が生き残っていて新居は葛飾区堀切小谷野町に移住したので、そちらに落ち着くことが出来た。両親が死亡した大半の児童は学童保育施設に分散して引き取られていった。しかし、食料が不足し、不安定な生活から、施設を脱走し上野の山にたてこもり、食料などを探し求めている。

東京は空前の食料不足で、日曜日ごと自宅の堀切から京成電車で千葉県まで米やさつま芋などを求め買い出しに出かけ、ふかし芋などを上野の山までに届けた。小学校卒業後、旧制中学校に進学し、高校まで6年間を過ごしたが、この間、食料事情もやや安定化してきた。

1947年9月キャサリン台風で利根川が決壊し、東京東部(葛飾、足立区など)は洪水に見舞われ、葛飾区小谷野町の自宅は屋根うらまで水位が上がり、全壊し、荒川区の小学校に避難した。その後、本籍地のある荒川区日暮里町に移住した。このように、2度にわたる災害に両親は立ち向かい、3人の子供の成長を見守ってくれたことに感謝の念を捧げます。父親新六49歳東電勤務(東京女子医大)、母親絹子64歳(愛知県大府町病院)で生涯を閉じ、それぞれ、丁重に弔いさせて頂いた。2度の大きな災害に立ち向かったので短命であった。菩提寺は東京都新宿区大久保1丁目16-15曹洞宗・全竜寺で両親は祖父亀次郎(土浦藩士・砲術指南役、後に京都府警中立売署長)、祖母すみ、と共に安らかに祀られている。東京にいる子供(長男、長女)と孫の3人とともにお参りしている。木下堯博はその後、中・高・大学を順調に卒業し、名古屋市教育委員会、名古屋市立工芸高校(12年間)、ドイツハイデルベルク大学留学、東京大学学位論文、九州産業大学(32年間)、国際印刷大学(21年間)と計65年間にわたり、印刷メディアに関する研究教育に携わり、86歳になった。主たる活動内容は画像情報の展望(2020年へのアプローチ)「1994年3月刊」とグラフィックアーツ学研究Ⅲ「2020年3月刊」にまとめられている。

詳細は国際印刷大学のHP(www.media-igu.com)を御参照して下さい。